

第二次世界大戦後のハンセン病を めぐる療養所における自己省察

国立療養所大島青松園関係史料の保存と
公開と活用に向けて

阿部安成

Yasunari Abe

滋賀大学 経済学部 / 教授

I

癩、そしてハンセン病をめぐる国立療養所の一つである大島青松園（香川県高松市）にいまも残る稀有な記録に、手書き手づくりで一つだけあるそれが「廻覧」されて読まれた『青松』がある。この史料の紹介をこれまでに、滋賀大学経済学部などの紀要を用いて発表してきた（直近の発表稿に、＜資料紹介＞シリーズ『青松』を読む⑬「手づくりで故人を偲び、戦後の新生を期し、風流と諧謔の詩歌に親しむ」『滋賀大学経済学部研究年報』第31巻、2024年12月、同⑬「第二次世界大戦後のハンセン病をめぐる療養所における「新日本建設」への思索」『彦根論叢』第442号、2025年1月、同⑭「手づくりで感謝と感激とを」Working Paper Series No.313、滋賀大学経済学部、2024年11月、があり、本稿はそれらに続く）。

この稀物とってよい「廻覧雑誌」（土谷勉「あとがき」『青松』第1号）は、第二次世界大戦下の1944年11月30日に第1号が「発行」された。これがいつまで続いたか。同園の入園者自治会がその創立50周年記念に編集発行した『閉ざされた島の昭和史—国立療養所大島青松園入園者自治会五十年史』（1981年）所収の「文芸活動の歷程」にみえる見出し「藻汐草」発行と外部指向の胎動のもとで、「23〔1948—引用者による。以下同〕年末の第46号まで続き、活版印刷へ移り、自治会誌へと発展する。」と記されている。その一方で、『青松』活版刷りの通巻第400号（第41巻第6号、1984年8月）の「表紙題字と揮毫者ならびにその年代」と題されたページには、手書き手づくり時代の『青松』写真と「創刊号以降、第四十四号までの

園内版、昭和十九年十一月号から二十三年九月号まで」とのキャプションが載る。

前者の記述にしたがうと、手書き手づくり『青松』は第46号（1948年）まで続いたと読めるし、後者からは、第44号（1948年9月）まで続いたとしなければならない。わたしが確認したところでは、大島青松園の図書室にあった同誌は第44巻（1948年9月）までだった（この手書き手づくり『青松』は巻号の表記が一定していない。なお、同園図書室保管分では、22、26～43のノンブルがふられるべき冊子が欠けていた）。大島でのフィールドワークを経て、そこにはまた、『青松』と題された活版刷りと謄写版（ガリ版）刷りの印刷物があるとわかった。1948年7月発行の『青松』は活版印刷で「林文雄博士昇天一週年記念号」と題されている。謄写版刷りの『青松』は第45号（1948年12月）と第46号（同前）とがあった。それに続く、『青松』通巻第47号（第6巻第1号、1949年1月）が活版印刷だ。

こうした現物の残りぐあいからして、さきの2つの史誌からの引用のうち、前者の「23年末の第46号まで続き、活版印刷へ移り」とは、たしかに第47号から活版印刷にかわったとの点は正しく、また『青松』が「23年末の第46号まで続いたとの点も正しいものの、ただし、第45号と第46号は手書き手づくり1部かぎりの冊子ではなかったといわなければならない。後者の「第四十四号までの園内版、昭和十九年一月号から二十三年九月号まで」は、1冊のみの手書き手づくり冊子を回覧していたので、それを「園内版」と呼ぶとすると号数と発行月号が正確だったのである。巻号数が記されていない1948年7月活版印刷の『青松』は林文雄医師の逝去にともなう臨時号であるがゆえのノンブルなしだったのだろう。

したがって、手書き手づくり1冊かぎりの「園内版」「廻覧雑誌」の『青松』は、現物が残る、1948年9月につくられた第44巻をもって終わったのである。

さきにみた『閉ざされた島の昭和史』編集時点では、おそらくこの手書き手づくり『青松』の現物をみたのであろうが、同書の節である「10 腹がへつても戦がつづく（昭和一八、一九年）」、「11 みどりの松がうらめしい（昭和一九、二〇年）」、「12 欠乏とのたたかい（昭和二〇～二三年）」、「13 最悪の医療」、「14 公民権の行使（昭和二一、二二年）」には、同誌からと明示した引用や参照は、1か所にしかみえない（この点はまたべつにとりあげる）。

前掲『閉ざされた島の昭和史』よりもまえに刊行された、三宅一志『差別者のボクに捧げる!』（ルポルタージュ叢書9、晩声社、1978年）では、「終戦とともに流入してきた民主主義思想は、入園者の理解をはるかに超えたものだった。当初ピンとこなかった〔中略〕文芸に熱を入れていた“インテリ層”の入園者四、五十人を中心にはとぼしるような研究がはじまった。／研究発表の場になったのが、自治会機関誌『青松』である。紙不足で廃刊になった『藻塩草』（昭和七年・一九年）の後を受けて、入園者の手で昭和一九年末、創刊された。二四年までの計四六巻は、薬紙の裏や粗末なザラ紙に細かな字でびっしり書き込んだ手書き原稿を、畳糸でとじたもの。」と紹介されていた（「7 闘争」の見出し「天皇の赤子から……」）。

著述にとりあげてはいるものの、さて、三宅は手書き手づくりの同誌を手にしたのだろうか。些細なところをいうと、たしかに「細かな字でびっしり書き込んだ手書き原稿」もあれば、原稿用紙の罫目の一つひとつにのっていいいにゆったりと文字を書き入

れた稿もある。すでに示したとおり、同誌第45巻と第46巻は、もちろん手書きではあったが、それを謄写版で刷った印刷物だった。

知られてはいても、しかし、その現物が手にとられてきちんと読まれたかどうかが不確かな冊子だったといわなくてはならない、手書き手づくり『青松』である。(史料の引用にさいして原文にある記号や抹消線はそのまま用い、誤記や当て字などにはいちいちママをふらなかつた。引用文中の／は、史料原文での改行をあらわす。)

II

手書き手づくり『青松』第16巻は、「田中先生／三浦様／特別感謝号」として編まれた(ここにいう田中と三浦については、前掲「シリーズ『青松』を読む⑭手づくりで感謝と感激を」を参照)。ここではその特集に即した稿のうち、熊野梅香、松本音松、久我剛、笠居誠一、土谷勉の執筆分をとりあげるとしよう。

熊野梅香(源市)の稿「^{マゴハロ}誠心は真心で」(原文では「誠心」には◎の傍点が、「真心で」には二重傍線がつく)は、12月22日付(ページノズブルは、綴じられた順に記すと、7=欄外左上端(これは1枚めの原稿用紙の欄外左上段にページノズブルとして7と記されていることをあらわす。原稿用紙の欄外上段の左右にページノズブルがあるばあい、以下、その旨を記す)、2=欄外左上端、38=欄外左上端、なし)。熊野は、田中と三浦による寄附という厚情を、「流れゆく藁一本にどぞこの身をと云ったら話が余りにも大袈裟に聞へるかも知れぬが、薄倖者の吾々としてノウと訪へばオウと応へざるを得ない今日の存在であり環境ではなかろ一か」(下線

部は原文では傍線)と、みずからどもを「薄倖者」におくところから、「救ひ」や「温情」が与えられれば、それにすぐに感謝でこたえたと述べていようか。同巻の別稿で園長が使った「慈父慈母」の語を熊野も用い、かつ、「田中先生を父と仰げばぎ=三浦先生は母と讃へねばならぬ」と慈しみをそれぞれ両者に分けてとなえる。

時局にも言及して、「時は移り年は代れど、殊に戦ひに破れた今日慌だしい年の暮に直面しても」、しかし、「^{フタコロ}両先生の誠心は終始吾等の身辺を離れたることなく、年々歳々物心両面に互り=病状は=生活は=殊に懐具合はど一かと、至れり尽せりの身に余る恩恵の如何に広く且大なるかを想起する時、只感謝と感激の念を一層深めざるを得ないのである」(傍点部は原文では○、二重下線は引用者)と謝し、記念果樹園によって「両先生の斯かる恩恵を永遠に讃仰する」と応じてさらに、「これに依つて得る季節季節の珍しい、そして新鮮な果実、果菜、野菜等々、金の尊さは茲に説く迄もないが、生活が逼迫し物の一つが尊い今日、この恩恵のこれまた大なるかを何に例へん=^{ナン}何と応へんやである」とさらなる「恩恵」に感謝する。

熊野はここに、忘れられない出来事を記す。それはかつて、田中一家が「吾等の為に態々慰問に来島、会館に於てお嬢様より無言の挨拶を受けたことがあつた、私もその挨拶を受け感慨無量に打たれた一人であつた、この無言の挨拶=お嬢様の胸中に入つて見ます時、その溢る、誠心=何と解釈するか=何と断ずるか、万感胸に迫り沸き来る涙を禁じ得ない者が誰一人としてあつたろ一か」(傍点部は原文は○)とおもいだされる、特別な、となるのだろう、そうした「挨拶」だった。

これはいささか詳細がわかりづらい。まったくひと言もない「挨拶」だったのだろうか。

そうした「お嬢様」の「無言の挨拶」もふくめた「誠心には真心を以て正しく明るく進まん事を契つて感謝のペンを擱く」(傍点部は原文は○、下線部は原文は傍線)と熊野はまとめた。熊野は「誠心」の語をじつに6回もこの文章本文に記した。

そのうえで「更に俳句、川柳の形を追記して」と——
俳句／東西の父母に恵まれ温き冬／風の何所^{イツコ}
を吹くや子等安し／世の波の荒るゝも知らぬ師
走かな／数知れぬ恵みに生きて年暮るゝ／撫で
る者誉める人あり甘藷の出来／川柳／お百姓
の努力で太い甘藷が穫れ／湯気の沸つ甘藷に
笑顔の数が殖え／頬張れる甘藷に感謝の声が
飛び／配給の蜜柑に籠の列が出来／抽籤で蜜
柑の数が一つ殖え

末尾には、日付のしたに「どぞ御笑ひを」のひと言。

手紙の体裁をとる松本音松の稿「平素の感謝を筆に代へて」にあらわれた、時世の見方をとりあげよう(ページノンプルは、おなじく、9=欄外左上端-1=欄外右上端、2=欄外右上端、10=欄外左上端-3=欄外右上端)——「過去八ヶ年の間、勝抜くために一切の困苦欠乏に耐へ勝利の彼岸を目指し闘つて来た今日=夢想だに予期せざりし敗戦と云ふ悲惨なる状態となり、国民の受けた衝撃と人心の動揺は又当然とも云ふべく、終戦後に於ける社会の情勢は一変し弱肉強食の修羅場と化し、生きんが為に斬虐なる行為が平然と行はれて居る事が新聞ラジオ等に報道されて居ります」と、松本からすると戦時ではなく「終戦後」こそが「弱肉強食の修羅場」にほかならず、「生きんが為に斬虐なる行為が平然と行はれて居る」いまがまさしく「敗

戦と云ふ悲惨なる状態」なのである。そうした時世であるとなおのこと、田中と三浦からの寄附は、「病友一同は只感謝と感激の余り胸が一杯になり、心の中で謹んで御礼を申し上げた」のだった(二重下線は引用者)。

自分たち「故郷より全く送金なく貧しき者に対」する「特別互助金」という「恩恵」は、「稍々ともすれば、肉親にさへ嫌遠される私共の為に斯く迄も御愛情を戴くことは、洵に相済ぬ次第で御座ります」との遜った謙虚さのみせられる。

また、ふたりからの寄附金を用いた記念果樹園の開拓によって、「天の恵みか本年は近年にない甘藷の大豊作に恵まれ、馬鈴薯、甘藷等を沢山に生産して乏しい主食を助け、社会に於ては食糧不足のため栄養失調に依り死亡者の続出する現今、私共は甘藷の豊作の御蔭により空腹を忘れ楽しい療養生活の出来得るのも、是れ一重に三浦先生の御恩情の賜物であることを感謝して居る次第で御座ります」という。

一方の田中はというと、「孤島に住む寂しい私共の慰安のため莫大なる資金を以てラヂオを創設下され、何時も先生の御恩情に感謝しつゝラヂオを拝聴させて戴いて居ります」との謝意を捧げる。大島でのラジオの活用は、かねてからつとに記録されてきたところで、この時期の同器は、田中の寄贈だったとわかる。

その田中は、「今夏敵機の空襲のため家屋を焼失され、洵に御気の毒の状態」と見舞いを述べなくてはならない境遇にあった。だからなおのこと、そうした「中に又先般も私達に対し沢山の寄附金を戴きまして、只々恐縮の外御座りません」と感謝するにとどまらず、「施受を知りて報ゆる術を知らぬ私共」であるがゆえに、「両先生より賜りました

数々の恩恵は、到底私の愚筆を以て書現すことは出来ません」と遜る。「恩恵」にたいする報恩とは、あたりまえの所為ともいえるが、それすらもがままならない「私共」が造形されてしまうのである。

久我剛も「恩恵乃数々」(題目)を述べる(ページノズルは、なし、11=欄外左上端、(2)=欄外右上端、(3)=欄外右上端。引用にさいしてカタ仮名漢字の原文をひら仮名漢字にあらためた)。まず1句、「温き恵に香る寒の梅」。田中と三浦ふたりの「温い御同情」「心からなる御理解」は、「沢山あ」る「通り一遍の同情者や一時的の親切なる理解者」とは異なると示す。しかも、「先生方方一人に止まらず、奥さん、お嬢さんと言った様に御一家族を挙げての御同情には、私達只々感謝感激の他ありません。」との深いところからの気持ちをもせる(二重下線は引用者)。その特別な加減は、寄附金についても、「毎年おぼんとお正月には、田中先生特別互助金として、三月と九月には三浦先生の特別互助金として百二十円宛、島の貧困病友や少年少女に下附されて居ります。」との篤志がある。

寄附金のありがたさはもとより、くわえて、「毎日寝ても起きても聴かして戴くことの出来る所内ラヂオです、外部との交渉の少ない島住みの私達病者にとりまして、何かばかり慰案になることでせうか。」とそのありがたみを伝える。さらに、「こうした時局下本当に有難いことは、田中先生、三浦先生の記念果樹園です、今は果物など外部からは絶対に入りません、それなのに時季の新鮮なる果物は勿論、特に増産の線に沿って沢山に出来ました甘藷を皆んながお美味しく頂くことの出来得ますことは、此の上もない喜びであり、感謝の他ありません。」と述べて、また1句、「有難き恵に生くる甘藷の飯」。

ここで久我もまた、さきの松本とおなじく、「恩恵」への報恩を思案する——「こうして御恩恵の数々に浴して居る私達はどんなにして先生や御一同様にお報ゆ申し上げたらよいでせうか、何一つとして生産することの出来ない働きのない私達はお互に持場、立場に於て自己の本分をつくし、祈りと信仰とを以て一生懸命に働き得ることこそ、私達に与へられた唯一つの務めでもあり、御同情に応へる道でもあると確く信じて居ります。」とは、具体相を示さずに、ただ、「お互に持場、立場に於て自己の本分をつくし、祈りと信仰とを以て一生懸命に働き得ることこそ、私達に与へられた唯一つの務め」だというのであり、それはまた、ついさきに、甘藷をつくったと記したにもかかわらず、「何一つとして生産することの出来ない働きのない私達」だからこそなのだった。

この久我の稿の末尾余白に、おそらく土谷の手で、「作業状況(十二月三十一日現在)」が記されている——「総人員 五一六名／普通室 二八四名／内訳、男二〇七、女七七／特定室 二三二名／内訳男一二八、女一〇四／作業希望者 一五五名／内訳男一〇六、女四九」。

笠居誠一の稿「感謝に更へて」も田中と三浦への謝辞を綴るその冒頭で、世間一般にみられる「癪院観」が告げられる(ページノズルは、12=欄外左上端、なし)——「溝の中に捨てた金はチヤブンと音がする、癪療養所に寄贈した金は何の返響も無く、全く無意味であると言ふ、神社仏閣に又は慈善事業とか社会事業に金品の寄贈をすれば慈善家、篤志家として、その名は有名になる、それに引換えて、癪院に寄贈を度々することは無理解なる人々からは誤解をされ、色眼鏡で見られる、何時か田中先生御来島の節の御話に、ある時、お

女中さんが、青松園へ寄贈の雑誌を局に持って行かれたら、局員は言ふ、大島青松園には先生の御親族の方が入園して居るか、誠に世の多くは、癲院と聞かえ汚れたる物と思ひ唾を吐きたくなる、私はこのお話を聞き、これが社会の癲院観であると思ふ、」。

さきの、遜るというにとどまらずいわば自損自貶の自意識にくわえて、療養所在住者たちがいうところの所外の「社会」では、「癲療養所」や「癲院」について、「無」「汚」などの「色眼鏡」視がもはやしつかりと定着しているといわざるを得ず、そしてここでもまた、それとの対比で田中と三浦の「恩恵」への「感謝の極み」をみせるのである（ここまでの4名みな「感謝」を記している）。両者からの寄附金——「特に今回、三浦様より向ふ二十ヶ年間毎年六百円づゝ、計金一万二千元也の御寄贈を園長先生の御放送に承り」、そうした金員は「特に故郷の送金の無き友、園内作業の出来ない、弱い友には田中互助、三浦互助の恩恵に浴して居る事は只々感謝の他有りません、」との浴恩なのだった。

笠居は「この感謝を短歌に詠みて御礼に更へさせて頂きます」と7首を詠んだ——「癲院に深き御同情寄せ給ふ田中先生三浦先生／肉親の親兄弟に捨てられし癲者に寄せる深き御慈愛／この甘^{ひと}誓は三浦農園のよといふ女の言葉は朗らかにして／甘誓の出来良ければ良くて先生の深き御心新に思ふ／御寄贈の雑誌の頁めぐりつゝ、幻に見る御姿尊と／新しき友に言ひつぎみ恵の深きの永くわかし偲ばむ／この感謝この喜びの表現に力足らざる身を悔ひにけり」。

III

冒頭に「田中先生／三浦様」と記された土谷勉の稿は、升目が謄写版刷りの20字×20行原稿用紙に記された21枚におよぶ大長編である（ページノンブルは、13＝欄外左上端-1＝欄外右上端、2＝欄外右上端、14＝欄外左上端-3＝欄外右上端、と見開きの左面のときに欄外左右上端にそれぞれページノンブルが13と1から始まり、欄外右上端には右面のときにもノンブルがつづき（右面のときには欄外左上端はページノンブルなし）、欄外左上端には13～23、欄外右上端には1～21のページノンブルが記されている）。

「先生と礼拝堂で御会ひしたのは昭和十八年でしたか知ら——」とふりかえる土谷にとって、長の無沙汰であっても「何日でも懐しい面影を臉に描くことが出来ます。〔中略〕私たちが笑ふと一緒に笑つて下さつたあの優しいお顔が紙面の枅にうかびます。」というその印象を、「田中先生は瀟洒、三浦先生は古武士的、同じ様に洋服を着て居られましたね。」と想起した。この土谷の長文は、「先生、おなつかしき先生。ご健勝のことゝ遥かに拝察いたします。」と手紙の体で始まっていた。

懐旧に親しみ、三浦の母堂の逝去を悼み、本誌手書き手づくり『青松』の前身ともいえる『藻汐草』への田中と三浦の寄稿をふりかえりながら、土谷は「身内の浄まるのを覚えた」という。それは「言ひ知れぬ敬虔さ——。さうです「靈波」とでも表現したらよいのでせう。居住を正し、凝乎、机に向いて目を閉じました。〔中略〕すると静かに自分を省ることが出来ました。」と自省の時間を過ごしていると、「部屋の鴨居に三浦様の写真が掲げてあります。両眼は為すなき怠惰の日日を叱つてをられるやう

です。炯眼は邪悪を憎む峻烈な洞察力に輝いて居ます。」と、想念における三浦との対面へと展開してゆくようすが記されている——

先生、私はたとへ海山遠く隔つて居ようとも、先生の目が常に吾らの上にあることを信じてをります。朝も晩も、或は夜寝た時も。いつ何処にあつて何を為てゐても——。斯う信ずることは、私の行為の一切の規制です。

と、みずからを省み、「先生」、これは文章では「三浦様」を指しているが、田中をくわえた両「先生」とみたほうがよいだろう——を「常に」意識化しようすへの自覚が述べられている。さらには、

先生。先生がいつも吾らの上を見守つて居て下さるといふことは、何と楽しい事でせう。何と生甲斐のあることでせう。瀬戸の小島に病を養ひ乍ら、これをしも隔離の身と言ふのでせうか。これをしも孤独と人は言ふのでせうか。人は如何してそんな感違ひをするのでせう。恐ろしいことです。

とは、自己(ども)を、いまあるそれとはべつに思い描くようすを懷旧とともに綴ってゆくのである。

ここで「旧臘昇天した長田〔穂波〕大兄」が想起され、「親も兄弟も遺族と名のつく誰一人もなかったのです。その当然孤独なる可き大兄が、あんなに朗かに楽しく安らかに一生を終つたのです。」と、その生涯のとらえ方がみせられる。しかも、「こんな境遇の人なら大兄ばかりではありません。幾人かありませう。」とその固有さをないものとしたうえで、「一步譲つて親兄弟があるとしても、何十年この方、便り一本ない病友に至つては数ふべくもないのです。淋しかるべき孤独のその友が笑顔で安楽に毎日やつて行けるのは、実に不思議ですね。不思議ですとも。」と、孤独であるはずなのにその日々を

愉楽で満たすかのような生を、いったんは突き放してしまふ。

だが、反転、「然し、何も不思議はないのです。御厚情を常に寄せて下さる先生方を身近に感じてゐるからではないでせうか。ある人は父と慕つてをりませう。一番近い肉親の一人と恋ふてゐるのが偽らぬ事実でないでせうか。」と、孤独であろうはずなのに、しかし安穩、愉悦、歓楽の日々があるそれは「先生方」の存在とその身近さゆえというのだ。

土谷の説くところを追おう——

先生、この病気を患つたといふだけで、見向きもせぬ親兄弟妻子は沢山あります。そのかまつて貰へぬ、所謂、捨てられた病友が、一度先生の愛——さうです、私はこゝで判然「愛」といふ字を使はしていたゞきませう——その「愛」に接する時、再生の思ひで泣いて喜ぶのは無理のないことではありませんか。病むことによつて親や兄弟を一度は奪はれた不幸な友が、病むことによつて幾層倍する立派な愛を勝ち得たのです。輝かしい幸福が、春の陽のやうに身辺をつゝみ、足許からは、愛の陽炎がゆらゆらと立上りました。心は常に颯々たる春の海のやうでした。

と、土谷は「先生方」を語りつつも、滔滔と自己どものありようを思索してゆく。

園内ラジオで「先生」からの手紙が披露されると、

その時一同はどんな雑談をしてゐても中止し、ラジオの前にきゝ耳を立てます。そしてその晩一夜、部屋中の話題を独占するのです。〔傍点原文〕

会話のようすを再現したうえで土谷はその場の描写を、こう綴った。

たあい無い雑談に花が咲き、笑ひ疲れて休むと、松籟が窓を静かに打ちます。潮騒が時に大きく、時に小さく枕に響きます。消灯した真暗い部屋の中で、人は皆、何を思ひ、何を考へてゐるのでせう。島の夜は静かに更けてゆくのです。

——「人は皆、何を思ひ、何を考へてゐるの」かわからなくてもよい、血のつながりも必要としない、療養所を生きる人びとがともに安寧平穩である時空がここにある、それは、園外の、島外にいる「先生方」あってこそとの認知が描かれているのだ。

だからこそ、さきにふれた三浦の母堂の逝去が、ことのほか、「島中を暗く辛いものにした事か。御想像下さいませ。」と語り掛けたいのだった。

甘藷の出来ぐあひも、それをよろこぶものたちの破顔一笑をうかがわせる記述として紙面にひろがる。

先生。香川県の今秋の甘藷の出来は、段当り平均三百五十貫——四百貫でした。然るに私たちの記念果樹園では、段当り六百メも七百メも穫れたのです。とても見事でしたよ。不思議ですね。御想像願ひます。一蔓で二貫四百といふ威勢のよさ。一貫五百だ二貫だといふのは珍しい事ではありません。一顆^(つぶ)百五十匁といふ怪物が現れました。焔^(こんろ)を横倒しにした程もありましたよ。吾々の自慢の種でしてね。それといふのも他所の畑のは鼠の尻尾みたいのですもの——。園長さん始め皆さんにまで自慢がてら御披露に及んだのです。吃驚されました。これは内所ですが、さぞ羨しかつたらうとひそかに思つてをります。／香川県下が大の甘藷の不作なのに、私らの畑だけこんな豊作だったのです。

とは、収穫のときも、また、そのようすを書いているときも、皆みなに笑みがこぼれていると容易く想うかべられる書きぶりだ。

これをしもわれらが努め、働きの実りとはせずに、また、「先生方」のただの「恩恵」だとはせずに、「先生、先生方の目が注がれてゐるからなのです。」と、自分たちを見つめる「先生方の目」があるがゆえに、その「目が注がれてゐる」客体であるから、そのわたしたちに恵みがもたらされたにとらえているのである——「亡きお母様や先生方の生命が通つてゐるからではないでせうか。さうで無くては、此処ばかりの豊作をいふことが如何して考へられませう。不思議ではないのです。記念果樹園が豊作つゞきだと言つても、誰も不思議に思ひません。信じ切つてをるのです。先生方の目が、生命が共にあると言ふことを——。」

この「目が注がれてゐるから」とは、監視下の囚人労働の謂では、もちろん、ない。そうではなく、「靈波」や「愛」の源泉である「先生方」から「目を注がれてゐる」と感じることで初めて、「甲斐」ある「生」を生きられるとの感応なのである。

さきの熊野、松本、久我、笠居は、みずからどもを薄幸、劣、弱、汚と形容される底位におき、その位置においてはどんな「御恩恵」にも報いられないとの底の底というべきところにみずからどもを位置づけていた。土谷は、おそらくは、そうした自覺を振りあげてする最低位からの離脱に「先生方」の「目」を活用したといえる。

この土谷の感応は宗教への信心にも似ている。土谷の心底からの病友には、大島のキリスト教靈交会の信徒がいくにんもいながらも、しかし、土谷はキリスト教徒ではなかった。神仏への信心のどあい、土谷はどのていどだったのかはよくわから

ない。そうしたなかで、両「先生方」の位相は、神仏のごとく崇める対象でもなく、また、「つれづれの」と歌いながらもけて自身が訪園することはなかった皇后とも異なる。ありふれたいい方をする、慈愛に満ちた庇護者というところか。そのうえで「先生方」は、「孤独」で「不幸」な病者をして、その生を生きさせるものとさせたところであらう。

土谷のペンは、11月下旬に掘りあげた甘藷の総量が4348貫240匁だったとはしゃぐがごとくに記し、その畑の隣の蜜柑がまた250貫もとれたと知らせる——「十円、二十円、外はととてもとても高値とか——。吾々には夢にさへ食べられぬ処でしたが、お蔭で蜜柑もいたゞけるやら——。ほんとに思ひがけぬお正月だったのです。これで戦争に勝つてゐたなら。所詮は愚痴ですが、時に触れて淋しく語合ふことなのです。」と、甘藷と蜜柑をよろこぶなかで、つい、というところなのか、土谷は「戦争」にふれてしまった。

IV

「戦争」への言及をきっかけに、つぎの段落からは、その「戦争」が主題として展開する。その全文を転載しよう。

先生、聖戦と呼ばれた大東亜戦争が、こんな悲痛な結末を告げると、はたして誰が想像したでせう。しかも同胞が責め合ひ、罵り合ひ、憎しみ合ひ乍ら、進駐軍を歓迎せうとは——。昭和二十一年のお正月とは斯んな相矛盾した事なのです。責任回避に汲々としてゐるかつての指導者と言はれる人々。この間まで「葉隠れ」を説いて武士道を訓へ、精神力の無限大、さうです無

限大を吹聴してゐた人々。なさけないことです。声を大にして言ふ処の「大和魂」とは、人の物は吾が物であり、吾が物は吾が物であると共に、道義は棄てゝも食物だつたら拾ふことだつたのです。敗戦といふ事実は人心をこんなにまで荒涼たる姿に変へるものでせうか。惨憺たる廢墟に立つて進駐軍を称へる声。これがこの間までの神国であり、肇国の歴史と共に国体の精華を人にも吾にも誇つた日本の現実の姿でせうか。／先生、先生はいつかのお便りに「日本の将来を思へば夜も寝られぬ」と。仰有いましたね。サイパンの陥落した直後ではなかつたでせうか。内線作戦の有利なことを軍は極力吹聴し、必勝の算吾に在りと胸をそらしたものです。先生はあの日既に今日あるを想像してをられたのです。彼らは悪酒に酔ひ呆けた猿だったのです。悪酒に酔ふは易くして、その次に来るを理性的に判断する良識の何と渺き乎。泥酔者と、その泥酔者の暴力を防衛する側。とぼしりを喰つて吾々も防空壕を一生懸命掘りました。横穴壕を五間も七間も山腹に。空爆下、生命の危険を考へ乍ら。遮二無二汗と脂の命がけで掘つたのです。道具はなくとも掘らぬ訳にはゆきません。二二が五に、八にと毎日ラジオは喚立てました。／島の北端に機雷監視哨が設けられました。夜を日について皆頑張りました。監視の必要性は認識してゐても、その具体的説明さへ弁へぬ当の無能な警察の命令で。刃物を持つた猿に吾々まで威嚇されました。この非科学、非合理的な日本精神(?)は、到頭、竹槍まで利器として取上げました。気狂は夜空に輝く星を見て、屋根に上りさへすれば竹竿で落せると思ふでせう。思ふこと、さうです、思つたり想像したりすることはその限りに

於て自由です。しかし、それを他人に強いることは出来ません。猿どもは竹槍を揮つてB29を墜さんとした。面白いですね。／昔、錬金術と言ふものが流行しましたが、それにはそれで科学性が合理性があつたのです。「推理」といふ理がたとへ幼稚ながらもありました。しかし、猿の竹槍を以てする威嚇はせいぜい身の囲り一間か二間、何千米の高空には及びやうもなかつた。この非科学非合理、これが塗炭の苦しみに国民を陥入れた最大の原因ではないでせうか。

——ここで、戦争についての論述が始まって初めて1行の空きがある。およそ原稿用紙3枚分のところだ。それまでなかなか語れずに書けずにきた「聖戦と呼ばれた大東亜戦争」についての、土谷なりの総括が一气呵成に開陳されたという勢いの文章には、ここまでで5か所の書き損じしかない。一息に書きあげたかの文章で土谷は、このかんの世の転変ぶりをとりあげて、それに呆れ、憤り、嘆き、蔑み、とりわけ「軍」にむけては「悪酒に酔ひ呆けた猿」との悪罵をなげつけ唾棄した。自分たちもその「とぼしり^(とぼちり)を喰つて」、防空壕を掘ったり機雷監視哨を設けたりした、そこに「非科学、非合理的な日本精神(?)」をみつつも、「猿どもは竹槍を揮つてB29を墜さんとした。面白いですね。」と呆れて放り投げてしまう。この「非科学、非合理」こそを糾弾すべきだとの姿勢を、土谷はみせた。

先生。何処も例外なくさうでせうが、島に於ても戦時戦後を通じ、物資はいよいよ急迫を告げてきました。当局の涙ぐましい努力によつて千二、三百カロリーは今の処確保されて居るとは言ふものゝ。しかし断然幸せなことは、既に野菜類の自給自足体制が確立されてゐること。／昭和二十年に於て山を墾き終り、その上、田中、三浦

両果樹園の背後をグングン開墾し、其処に春の馬鈴薯を、夏の南瓜を、秋の甘藷を、そしてその後作に、白菜や大根まで植えつけたと言ふことです。しかもそれらが何れ劣らぬ豊作で、甘藷には先に触れたが、南瓜だつて一夥三貫八百といふ化物が、足の入れ場もない程、ゴロゴロ転つたのです。戦時空襲下、此方には一人の負傷者も出なかつたのですが、畑の南瓜が艦上機の機銃掃除をうけて怪我をしたことがあります。危いことですね。まさか鉄兜とも思はなかつたでせうに。

——この手書き手づくり『青松』誌面を読むかぎり、戦時下の大島の食糧事情は、もとより潤沢ではないにせよ、命が危殆に瀕するほどひどく貧窮していたのようすはみられない。防空壕を掘り機雷監視哨を設け、対岸の高松が米軍の空襲にあったとはいへ、大島では「一人の負傷者も出」ず、わずかに「南瓜が艦上機の機銃掃除をうけて怪我をした」ていどだという。深刻ぶらないようすは、土谷ならではなのかもしれないが、句歌の編集に馴染んでいたゆえか、「病友」の句を引いて現状をあらわす。“茄子胡瓜今年のものゝ甘さかな”／(香山爽子)／物が不自由でもいたゞく物のすべてがほんとに美味しいといふことです。青菜や大根の持つ甘さを知つたとは大発見でせう。記念果樹園で穫れた甘藷の如きは、一顆よく山海の佳肴珍味を盛つて余りがあります。それほど風味と言ひ、甘味といひ申分なかつたのです。歳末には事務官殿に、三浦互助金の中から支出をお願いし、その美味い甘藷を「三浦様からの贈物」として一同に配給したのです。皆の喜び様たら——。

——とのいわば収穫賛歌はとてものびのびとした文章で、そこには土谷たち療養所在住者たちの歓喜が満ちあふれている。

ここまでで、原稿用紙21枚におよぶ土谷稿の14枚分。原稿用紙には、土谷稿9枚めの「先生、聖戦と呼ばれた大東亜戦争が」の改行箇所欄外に、2字分ていどの鉤記号をつけたうえで「12頁マデ放言ヌキ」との鉛筆書きの文字がある。「放言」の箇所はかすれていて判読がむづかしく、べつな文字であるかもしれない。そして、土谷稿12枚めの「この非科学非合理、これが塗炭の苦しみに国民を陥入れた最大の原因ではないでせうか。」のあと1行空きの欄外にまた2字分ていどの鉤記号をつけて「ヌキ」との鉛筆書きがあった。この鉛筆書きの手は、土谷ではない(わたしには、林文雄の書き癖にみえる)。

さきにみたとおり、土谷稿9枚めでは、甘藷と蜜柑の出来をありがたがっていた箇所で、「これで戦争に勝つてゐたら。所詮は愚痴ですが、」とこぼしたところから、「聖戦と呼ばれた大東亜戦争」をめぐる事態の評価検討へと記述が転じてしまったのだった。そして同稿12枚めからまた食糧のありがたみへの謳歌が記されてゆく。そのあいだの戦時と戦後をめぐる慨嘆や憤慨を、(さきの判読が正しかったとして)、「放言」とみるむきがあり、その意思が該当箇所を「ヌキ」(削除)と指摘したとみえる。手書き手づくり『青松』誌上での、戦争のとらえ方をめぐる見直し(revision)の端緒である。

土谷の食糧をととした思索にもどろう。

先生。何を食べても美味しいといふこと。物資は貴いといふこと。この二大教訓を得たことは、よし戦争には負けようと、類なき収穫ではないでせうか。未だ曾て識らなかつた感激ではありま

せんか。甘藷の持つ甘さ、青菜の美味さ、病友は呵々と大笑し乍ら、それらの事を楽しく語合ふのです。／何でも美味しいといふこと。／物は貴いといふこと。／あたり前の事柄でせうけれど、人世の根本に触れる大問題ではないのでせうか。二大教訓あつてこそ、人の情有難さ、病友は今こそあらためて敬虔な気持ちで痛感してゐるのです。道義の頹廢が世上に云々され、日本人の節度さへ疑はれ勝なこの秋、島に一人の犯罪者もなく、山の如く静かに整然と秩序の保たれてゐることは、いつたい何に原因するものでせう。むろん一、二に止まりますまい。数々あるでせう。しかし、それらを一つ一つ指折り数へることは余りに抹梢的です。寧ろ危険です。それらの由つて以て来る原因、つまりその根底とでも言ひませうか、それを一歩進んで深く探らねばなりません。／先生。私は先に「物は凡て美味しいこと、貴いこと」と共に「人の情有難さ」を記しました。人世観につながる根本命題と言つたのはこゝです。誰も彼もが一様に先生の温い目をうなづいて感じてゐるからなのです。だから表裏がありません。蔭も日向もないのです。人は自然裏にまことの道に進むでせう。風波の立たう道理がないではありませんか。〔傍点原文〕

——土谷の思索は、「甘藷の持つ甘さ、青菜の美味さ」を味わいながら「二大教訓」を「敗戦」にもかかわらず得られた「類なき収穫」だと、その意義をうたえる——「何を食べても美味しいといふこと。物資は貴いといふこと。」⇒「何でも美味しいといふこと。／物は貴いといふこと。」⇒「物は凡て美味しいこと、貴いこと」「人の情有難さ」との変奏が「二大教訓」である。これは、「誰も彼もが一様に先生の温い目をうなづいて感じてゐるから」こそ得られた「人

世観につながる根本命題」、いいかえると、生きるうえでの基本姿勢というところか。「先生」からの「恩恵」、「先生」から放たれる「霊波」や「愛」、「先生」の存在それ自体があるがゆえに、それを被る自分たちが、「隔離」され、ともすれば「孤独」に泥まなければならない療養所において、そこを生きるうえでの基本姿勢を獲得できた、と土谷はみずからどもをとらえてみせたのである。どんなものでもおいしく、それは貴い、そうした食べるものの味わいはまた、ひとの情のありがたさを身に沁みさせる、ということだ。

土谷が自覚するこの自己のありようは、光被である。「先生」「先生方」が光源であり光そのものでもある。その光を被って、自己がある。そうした位相は、土谷の文面にもあらわれている——「先生。」という書き出しがそれだ。

「二大教訓」を述べたあとでまた、「戦争」について記述がくりひろげられる。

先生。戦争は大敗を喫して終わりました。しかし、それは敗れる可くして敗れたのであつて、そこには一貫した合理性さへ窺へます。敗れるべくして敗れた合理性なら、起直るべくして起直る合理性を将来に求めることも可能でせう。戦争責任の追求はお互にこの意味から等閑に出来ません。敗戦日本の新しい門出に吾々は正しく進むべき道を見出さねばなりません。いばらの道かも知れませんが、困難の数々が横たはつてゐるかも知れません。しかしそれらは忍耐と努力によつて物の見事に切り拓かるべきです。先生の目に見守られつゝ、導かれつゝ、励まされつゝ、むしろお互が楽しく腕を組むことによつて、将来笑合ふ日のあることを誰一人疑はないのです。／〔1行空き〕／先生。吾々の身边はよし貧しくとも心は

大人の如く豊です。孤独を忘れたからでせう。常に、さうです四六時中を先生と共にあるといふことは、如何にたのしい人生でせう。すべての力の泉なのです。あらゆる力が滾滾と湧立つのです。——ここにおいて土谷は、明確に、戦後へと動き始めたといえる。「敗戦日本の新しい門出に吾々は正しく進むべき道を見出さねばならぬ」といばらの道かも知れない「それらは忍耐と努力によつて物の見事に切り拓かるべきです。」との方向へと動くときのその質量が「戦争責任の追求」だという。土谷の文章をよくよく読むと、これまでとは異なるあらたな動きは、この「敗戦日本」という時と場における「新しい門出」だけとはみえない。もう一つ重要な光被からのほんのわずかな胎動とでもいうべき始まりを感じる。それは、「むしろお互が楽しく腕を組むことによつて、将来笑合ふ日のあること」のとくに、「むしろ」の語にあらわれている。そのまへは、「先生の目に見守られつゝ、導かれつゝ、励まされつゝ、」と、まさに光被の自覚を書き記していた。そこにつづく文に、「むしろ」というその語の前か後者かどちらなのかというならば後者をこそ採るとの意思表示をおいたのである。光被として療養所を生きるよりは、むしろ、「お互が楽しく腕を組むこと」とは、閉ざされたとみられがちな、また、そうみてしまいがちな療養所での協同の謂であり、その実践をとおして、「将来笑合ふ日のあることを誰一人も疑はないのです。」と見晴るかすのだ。

ここにいう、「お互が楽しく腕を組むこと」を遂行しつつあるとは、すでに、なによりこの手書き手づくり『青松』の16巻までもの継続蓄積に明らかである。光被という殻を脱げるかどうか、また、脱げるとしてそれをどのようにするのか——土谷たちの技量が問われる。

さきにみた、「あらゆる力が^{（こんこん）}滾滾と湧立つのです。」の1文までが、土谷稿16枚め。ついで17枚めからは、「先生、こんどはお慰みまでにたのしかつた去年の行事を二三記して見ませうね。」と始まる、ものはづけ、麻雀、短歌と俳句の連座会、素人演芸、放送劇の紹介がつづく。そして、

先生、御承知の通り「藻汐草」は時局下休刊としてをります。先生に見ていたゞけないのはこの上なく残念ですが、そのうち又印刷出来るやうになるでせう。休刊中、園長さんの御言葉もあり思ひついたのが、園内回覧誌「青松」なのです。休刊中と謂へども吾らの文芸をも中絶することは実に残念ですからね。いや、その反対に止むに止まれぬ病友の熱情が「青松」を生んだと言つた方が妥当かも知れません。お蔭で「藻汐草」に書いてゐて呉れた人々は全部つゞけて書いて呉れました。「藻汐草」のやうにお上品でなく、遠慮気兼ねのない処が却つてよいかも知れません。紙なども各々有りあはせですから、その雑然たる処が欠点でもあり長所でもあります。／「天に雪霜なくんば青松も草に如かず」と、言ふ有名な言葉がありますね。どんな困難があつても青松だけは枯れはせぬといふ意気込なんです。雪や霜に枯れる草ではないぞと胸を張つた処なのですが、傍から見たらどうかしら——。

とは、『藻汐草』休刊、手書き手づくり『青松』の制作、その命名をめぐる回顧である。

つづいて、同稿20枚めでは、島内の逐次刊行物への常連だった長田穂波の回顧。

長田大兄も万障繰合して毎号執筆して呉れました。亡くなる直前まで書いて呉れました。最後の

一文は再録して大兄の追悼号を飾ることにしてをります。大兄の追悼号を作らねばならぬとは、何といふ悲しいこととせう。「藻汐草」以来「青松」に引続いた「松籟海鼓」は、時局が立直り次第、早速まとめて上梓したいと考へてをります。そんなになつたら先生の玉稿も是非いたゞきたいと、今からたのしみにしてをります。

——本誌手書き手づくり『青松』第15巻（1945年12月）に掲載された、ここにいう「松籟海鼓」の最終回は、「新日本建設と青松園の巻」と題された（長田のこの論考については、前掲「＜資料紹介＞シリーズ『青松』を読む」⑬「第二次世界大戦後のハンセン病をめぐる療養所における「新日本建設」への思索」を参照）。長田の論考は、同誌第16巻に載る、「田中先生／三浦様」に宛てられたこの土谷の労作とともに、大島青松園における在住者の敗戦とその後の思索を報せる重要な稿である。だが、土谷が算段していた長田連載稿「松籟海鼓」の「上梓」は、かなわなかった。その理由は、わからない。

こうした出版の展望を記したそのあとに1行の空きを入れて、土谷はこう記した。

先生、戦争が終つて何だか重苦しい気分が少くとも薄らぎましたね。敗戦といふ現実に対し、この気持は許すまじき罪悪なのでせうか。然し、この気持が事実としたら考ふべき余りに多くのものがあります。「新生日本」といふ言葉が誰に気兼ねもなく声を大に叫ばれる所以とせう。立派に許されてよいことなのす。寧ろ強張さるべきなのです。たしかに矛盾なのです。然し、この矛盾が進化の母胎なのです。明るい逞しい心、毅くて美しい心、どんな困難にも打克つ忍耐で昭和

二十一年度を生き抜きたいと、誰もが一様に願つてをります。何卒、御安心下さいませ。

——この末尾の1文は、やはり、さきにみた光被の殻を脱ぐ初動にみえる、なにとぞご安心くださいませ、わたしたちは、わたしたちで、わたしたちを生き延びます、とのささやかな宣言である。

掉尾の5行——「先生。／御家族御一同様。今年も御幸福で御健勝にわたらせませう様、衷心より遙かに祈上げてペンを擱きます。／呉れ呉れもお身体大切に」。

すでにみたとおり、この土谷稿の冒頭には、宛てどころとして「田中先生／三浦様」と記されていたのだから、これは手紙の体裁をとっているといえる。ただし、これまたすでにみたとおり、今次の「敗戦」をどうとらえるのかを示しているがゆえに、私信としては例をみないといってよい、原稿用紙換算で8000字をこえる文字数を必要としたのである。くりかえせばこの土谷稿は、本誌手書き手づくり『青松』前巻に寄稿があった長田穂波の「松籟海鼓」とならんで、1945年直後のハンセン病をめぐる療養所における現状と自己についての認識の重要な証跡である。

土谷稿21枚めの余白には、太い墨の線で囲まれた枠内に、「餅搗」と始まる文章がある。かつての巻であればこれは、「潮音」という題目がついた囲み記事の体裁である。その内容は、

餅搗＝十二月三十日朝食後より聯合奉仕団員約七十名出動、お正月の餅搗を行ふ／七俵、一二八臼。／日本一の盛況裏に無事十一時半終了／高橋先生の言葉／「時局下、こんな景気のいゝ賑やかな餅搗は恐らく日本中こゝだけでせう

——7俵とはたしかに豪気だ。仮にひと臼2升とすると、128臼で256升＝2560合を数える。ひとり1合分とすると2560人分、さきにみた本誌本号での記載では「総人員 五一六名」だったから、在園者数はこの数字のとおりだとすると、ひとり5食分くらいの分量となろうか。「景気のいゝ」ふるまいだ。その餅つきは、「聯合奉仕団員約七十名出動」でおこなわれたとのこと。戦時下に組織された「聯合奉仕団」が依然として機能していたか。

VI

さきにみた三宅一志の著書『差別者のボクに捧げる!』では、あたらしく「流入」した「民主主義思想」の「研究発表の場」として「自治会機関誌『青松』」をとりあげていた。厳密に言えば1945年前後の同誌は「自治会機関誌」ではなく、また、土谷たちの稿が綴じられた本誌第16巻にみえる「内規」でこのさきの方針が示されたとおり、この同人誌は「文芸」を軸とした投稿とそれを読む媒体であって、「研究発表の場」といってしまうと同誌をとらえ損なってしまうだろう(ただし、その「内規」からは同誌の周辺には「研究会」という活動があったとわかる)。他方で確実に、「文芸に熱を入れていた」同人たちは、「研究」を始めていた。その主題のひとつが、べつにみたとおり(たとえば、前掲<資料紹介>シリーズ『青松』を読む⑬「第二次世界大戦後のハンセン病をめぐる療養所における「新日本建設」への思索」)、「デモクラシー」だった。戦時下の療養所を生きた大島青松園在住者たちは、その戦後の後をめぐる「日本」なるものを新たにすることと連動して、居場所である園のゆくさきを考え始めた。

それはまた同時に、そこを生きるみずから(ども)の省察だった。

戦争の後に生じた変容は、療養所を生きるものたちをいわば「蟬蛻」へと牽き出したのだった(阿部安成「癩と時局と書きものを一香川県大島の療養所での1940年代を軸とする」黒川みどり編『近代日本の「他者」と向き合う』解放出版社、2010年)。療養所を生きるものたちにとって変容の場は、療養所にほかならなかった。

【附記】

本稿は、2024年度科学研究費基盤研究(B)(一般)「近代日本の「老い」ゆく場と人びとの生をめぐる歴史研究—療養所と寄せ場から考える」(研究代表者一橋大学大学院社会学研究科石居人也)の成果の一つである。

